

第十八編 南富良野村交通史

第一章 概説

和人移住以前のアイヌの交通路や、松浦武四郎の通路については第一部に書いたのでここには鉄道と道路の前身を中心に書くことにする。

第二章 十勝街道

第一節 十勝街道の文献

南富良野村の交通を語るにあたって先ず第一に考えられるのは、上川から富良野に出て、富良野から十勝に出る交通路である。

この線は石狩と十勝を結ぶ重要な線なので、北海道史の上でも浮びあがっている。しかしこれは通路として考えられていたもので道路としては考えられない。

近江正一の調査によると次の通りである。

前松前藩時代（寛永十八年、西暦一六四一年より享保

五年、西暦一七二〇年に至る）に陸地を横断して西海岸を連絡する通路としては、河川を利用し得る所は丸木舟で上下した。とあるが北海道史によれば左の六線があつた。

遊樂部と瀬田内間

長万部と歌棄間

勇払と石狩間

石狩より上川のタナシに出で天塩に越える線

十勝よりフラヌに出て上川に至る線（本村通過の路線と推定される）

釧路及根室より斜里に至る線

つづいてここに大きい問題となるのが、十勝日誌による安政五年松浦武四郎が、空知川上流から十勝川へ降つて行つた「十勝日誌」の記録である。このことについては第一部に書いたのでその方を見てほしい。

これは本村の開拓以前のアイヌの交通路であつて、この点で重要なものであるが、アイヌ人を道案内にしていながらなお道に迷つた有様が見えるのが面白い。とにかく

く容易でない道なのである。まだ今日我々の考えている道路でなく通路である。

旭川から十勝の帯広に通ずる道路は、林頭三著「北海誌料」によると次の通りになっている。

十勝街道 旭川から十勝帯広に通ずる道路は、明治三十年鉄道開通につき下富良野以東は仮道路を開通し漸次修繕を加え、困難の箇所はあるが馬行差し支えなし。

自上川郡旭川村至全郡神楽村辺別	三里	二町
自全郡神楽村辺別至全美瑛村	三里	二十八町
自全美瑛村至空知郡上富良野村	五里	
自空知郡上富良野村至全中富良野村	三里	
自全中富良野村至全下富良野村	三里	
自全下富良野村至全村字トナシユベツ六里	十八町	
自全村字トナシユベツ至全村ルーオマンソラプチ	七里	

合 計 三十一里 三十町

と「北海誌料（林頭三著）」に掲載されているが、トナシユベツは金山、ルーオマンソラプチは落合と解すべきである。

鴻上寛一著「上川開発史」には次の様に出ている。

十勝線鉄道敷設に先立つて、十勝街道は明治三十一年下富良野まで開さくされ、旭川—ルーオマンソラプチに至る三十一里三十町の間は馬を通ずるに至り、鉄道の開通と相俟つて拓殖の氣勢頓に昂まつたのである。かくて殖民熱を鼓吹したので資本及び土地にめぐまれなかつた内地人かおしよせてきたのである。

第二節 西達布經由の理由

さて文献の引用はこの位にして筆者の調査したところをのべることにする。

空知川の上流に向つて左をのぼり山部村内にある現在の東大樹木園前から村界を越して旧東山村（富良野町に合併）にはいると西達布川の落口がある。この西達布川に砂金沢の流れが落ちてはいるが、ここに指導標が立つていたことを山部村誌が、山部開拓の重要人物だつた小林菊次郎談としてのせている。

なぜここに指導標が立つていたか、それは明治三十年代の交通の道路がここから本流を離れて支流の西達布川をさかのぼる分岐点だからである。

何故本流をさかのぼらなかつたか、それは金山の奥にいわゆる『天狗の鼻』と称する自然の要害があつて、空

知川が複雑な地形の中を曲つていたので通行が出来ず、また鹿越の模範林附近も一つの要害な場所であつたためである。

こうして当時の通路は東山村（現富良野町）の二ノ山と三ノ山の分水嶺をこえて、南富良野村の伊勢団体に出再び空知川の主流に達するのである。

ここで本流を渡舟で渡つて幾寅に達し、落合に進んで行くのであるが、落合からは再び本流を離れて、ルーオマンソラプチ川を上流にさかのぼつて行くのである。

こうして落合の昔十勝にぬける唯一の道路であつた、串内の駅通所在地に達するのである。串内から更にルーオマンソラプチ川をのぼつて石狩と十勝の国境を越すと新得町の広内に出ることが出来、佐幌川を下つて清水町で十勝川に達し帯広に降れるのである。

以上の路線はほぼ現在の一級国道と同じであるが、ちがつているのは東山村（現富良野町）の西達布川から再び南富良野村の空知川本流に越すところである。

次に落合から十勝に越す場合、串内を通らず狩勝国境を越している二箇所だけである。この二箇所のうち国道としては、むしろ串内を通つた昔の国道の方が合理的であつたのではなからうか。

鉄道も筆者が設計したら串内に持つて行つたと思う。山部から幾寅を結ぶのは今の一級国道を通したかも知れない。

第三節 十勝側から見た十勝街道

さて以上は石狩側から見たのであるが、今度は国境を越して十勝側から見ることにしよう。新得町史は次の様に書いている。

明治三十一年十月帯広より石狩に通ずる道路が開きされたが、この時の状況について殖民地撰定報文は次の様にのべている。

明治三十一年帯広より石狩国旭川に達する道路を開きくす。其の路はサホロ川を西方を經過し、パンケンツ、パンケンツクより嶺を越えて石狩国に入り、而してペケレベツ、パンケンツクの二カ所に人馬継立所を設くる予定にして、帯広を距るペケレベツに於て七里三十町、パンケンツクに於て十里三町とす。この道路は区画地の開拓に大なる便利を与うるや必せり。

この時設置を予定されたペケレベツ、パンケンツクの二人馬継立所が、いわゆる駅通所であつて、ともにその翌年明治三十二年八月一日に設けられたのである。

右のうちペケレベツに設けられたものは、現在の清水市街にあつて村山和十郎が取扱人となり、官馬七頭、私馬七頭を有していた。

他の一つパンケンストクに設けられたものは、字新得八号線が石狩街道と合流するあたりにあつて、鎌谷与七が経営していた。馬七頭、馬車一台を備えていた。駅通所内は且那衆用十二畳一、公衆用六畳一、八畳二、計三間を有し、且那衆用には当時の官員が宿泊し、他を宿泊せしめなかつたという。(中略)

当時の駅伝経路は帯広町よりペケレベツを通り、パンケンストクにて、日高鞍部を越えてクシナイに出、ついで落合に出て石狩に向つたもので、明治四十年鉄道開通に至るまで交通上重要な役割を果たしていた。

ここに書かれている字新得八号線が石狩国道と合流する地点はその頃広内と称され、今も地図の上にその名が残っているが、現在は人も知る北海道立種畜場のところで、新得駅のホームに立つて狩勝国境の左の山を仰ぐと石狩に越して串内に出た鞍部が、狩勝とは問題にならない低い線を見せているのである。新国道の方がはるかに複雑で高い山にのぼっているのはなぜだろう。歴史に忠実なものなら一度は問題にしたいところである。

現在幹線になつていゝる一級国道はこの旧国道とちがつているが、新得町史は次の様に書いている。

一級国道は公称札幌根室線と呼ばれ、上川郡清水町より入り、新得基線を北上して町内を縦貫、新内を経て狩勝トンネル上を通過し石狩に抜けるもので、(中略)昭和六年六月には帯広土木事務所の直営により、新内落合間の開さく工事が開始され、同年十一月完成、翌七年十二月既設新得、新内間村道も同事務所の手によつて改修された。

第四節 本村を經由した十勝移民

本村には金山の駒井幾久太郎の様に十勝から串内を通つてきた者もあるが、移民は例外なく空知川をさかのぼつたのである。(東山經由)

しかもこのことは国境を越して十勝の新得から清水に及んでいる。新得町史によると、

明治三十三年に至つて、橋井松五郎、橋井弥平衡らの先導で約百名の移住者が、山形県北山村郡高崎村字関山(北海道開墾組合)からきた。この時の経路は室蘭から上陸、貨物列車にのせられて旭川まできて、ここで途中の野宿も覚悟し、米、味噌、塩を買い、更に建設列車で

上富良野にきて、ここから金山——第十工区（工事場）——落合と宿りを重ね同年四月六日漸く石狩、十勝の境を越えたのである。

かくて日没後駅逦に到着、更に暗路をさぐりつつ六号線まで下った。このとき三十二年移住者の一人が大声で一行の到着を叫び、喜びの出迎をしたという。

一方山形団体の入地と時を同じくして、広内豊実名儀を以てシントク原野西二線より三線間二十八戸分の払下を受けた大原利三郎、渋木八郎次、片山駒次ら高知県人が入地、又福井県より徳橋清助が十数戸の越前団体を引つれ佐幌基線三号附近に入地した。この一行は（中略）上富良野まで貨車にのり、上富良野で二泊後金山落合を経て狩勝峠の鉄道測量のあとをたどったのである。

清水町史によると、

石狩道路開通後に於ける人舞村は内地から室蘭經由旭川を経て鹿越駅まで鉄道に乗り、其処より駅逦馬によつて落合から新得駅逦を通じ、ペケレベツ駅逦所に達し芽室方面に向う状態で、（下略）と書いている。

開拓時代からこの道路がどの位重要であつたかが、これによつて充分知ることが出来る。

第五節 一級国道

昭和二十六年に道路法が改正されるまでは、札幌小樽間の国道五号線と札幌旭川間の国道二十七号線しかなかつたが、現在の一級国道三十八号線は地方費道路であつた。

それが昭和二十六年に一級国道三十八号線となつたのである。

落合と幾寅に駐在所が出来たのは、戦後の昭和二十一年から二年であつて、富良野—西達布間は除雪されているが、本村関係のところは行われていない、そして一級国道としては最も悪い区間に相当している。

第三章 金山占冠間道路

第一節 アイヌと砂金掘の通路

一級国道の外に本村には旭川—浦河間の二級国道が走っている。山部村では始め空知川の右岸をのぼっているが、東大樹木園のところでは左岸に移り、（山部大橋）西達布川を渡つて南富良野村に入るのである。